

*Astrophil and Stella*における/thou/と/you/の用法

富原裕二

Sir Philip Sidneyのソネット連作*Astrophil and Stella*のなかには無生物へのアポストロフィが多く見られる。聞き手となった無生物に対して使われる二人称代名詞(単数)は、慣習的には/thou/が普通である。しかし、Sidneyは時に/you/を使うことがある。本稿は、無生物を聞き手とするアポストロフィにおいて/thou/と/you/とを区別する基準がどこにあったかの考察を、聞き手に与えられた役割の観点から試みたものである。

*

Sir Philip Sidney (1554-1586), Edmund Spenser (1552-1599), Samuel Daniel (1562-1619)の三人の詩人はエリザベス朝を代表するソネットの連作を残している。聞き手の観点から見ると、三人のソネットには注目すべき共通点がある。いずれも理想化された貴婦人/lady/への愛を歌っているが、相手の/lady/は作品中での聞き手 (addressee)となることは比較的少なく、三人称で歌われる対象であることのほうが多い。その場合の聞き手は、友人など世間の人々のこともあるが、最も多いのは、人間ではなく、アポストロフィで呼びかけられる抽象観念やアレゴリー、想像的人物、無生物の事物などである。ところが、聞き手に関する全体的枠組みにはこのような共通点があるにも関わらず、聞き手に対して使われた二人称代名詞を比較すると、三人の詩人には互いに注目すべき相違がある。

当時二人称代名詞には/thou/と/you/ (ye) との二種類があった(それぞれの格変化形も含めて/thou/と/you/で表す)。SpenserとDanielでは/you/と/thou/との使い分けが明快である。DanielはDeliaに語りかける時/thou/だけを使い例外がない。反対に、SpenserがElizabethに対して使うのは、一度の例外を除いて/you/ (ye) である。例外は‘goddess’と呼びかけた*Amoretti* 22の結び‘The which, vouchsafe O goddess to accept, /amongst thy deerest relicks to be kept’においてだけである¹。Elizabethを‘goddess’と同一視したことによる例外である。この一つを除けば、二人の詩人はそれぞれの/lady/に対して/thou/と/you/とを、正反対に使い分けた。人間

以外へのアポストロフィに関しては、後でおこなう補足の説明をつければ、どちらの詩人も単数の相手には/thou/だけを使ったと見なすことができる。また、/lady/以外の人間に語りかける場合にも、二人は共通して、ただし/thou/ではなく/you/を使った。SpenserとDanileの二人称代名詞の使い分けは、それぞれの結果は異なるが、どちらも聞き手が誰であるかの基準によっていたのである。

Sidneyの二人称代名詞の使い方は二人の詩人ほど明快ではない。Stellaに対しては/thou/と/you/の両方が使われ、同じソネットのなかに混在することさえある。人間以外へのアポストロフィを見ると、/thou/が一般的であることは、上の詩人と変わらないが、四例の/you/がある。このような不統一は、Sidneyの二人称代名詞の選択が、二人の詩人とは異なり、聞き手が誰であるかの基準だけで決まったのではないことを示している。では、Sidneyの使い分けはどのような基準によるのか。本稿での考察は、Stella以外の聞き手に対して使われた二人称代名詞だけに絞っている。Stellaに対する二人称代名詞の用法を理解するためにも、周辺の考察から始めることには意味があるからである。

*

エリザベス朝の英語では二人称代名詞として/thou/と/you/との二種類があった。本来、/thou/と/you/のあいだには単数と複数の違いによる明確な区別があった。しかし、13世紀ごろから二人称複数の/you/（あるいは/ye/）が単数としても使われ始める。もともとは目上への尊敬を表すためであったが、後には対等な相手にも普通に使われた。一方、本来の単数二人称であった/thou/は次第に廃れていく。しかし、その後も長い間目下に対しては使用され続けた‘long retained in addressing an inferior’（OED）。エリザベス朝は/thou/から/you/への移行の過程にあたる時代であり、話者と聞き手との関係を反映して使い分けられたようである。Sidneyら三人の詩人と同時代のShakespeareの演劇では使い分けが複雑である。E. A. Abbottは/thou/が使われる場合を次の四種類の感情表現として分類する²。

- (1) 友人間の親しい愛情 (affection towards friends)
 - (2) 上位から下位のものへ優越感 (good-humoured superiority to servants)
 - (3) 見知らぬものへの軽蔑や怒り (contempt or anger to strangers)
 - (4) 高尚な詩的なスタイルと厳粛な祈り (in the higher poetic style and in the language of solemn prayer)
- (1)から(3)までの用法は社会的関係に基づく感情表現である。/thou/が下位に使

われる(2)は理解しやすいが、(1)と(3)の用例は、下位への用法(2)のそれ以外の相手への適用である。(1)の友人関係で親しみを込めると/thou/が選ばれる理由は、目上への尊敬を表す/you/はよそよそしい印象を与えるからである。反対に、下位に使うべき/thou/を敢えて使うことで、(3)のように侮蔑を表すこともできた。これら三つの/thou/は社会的な関係に依存する用法である。

ところが、Abbottが最後に挙げた(4)の用法は、社会的な関係ではなく文学的表現としてのスタイルを理由に/thou/が選ばれる用法である。当時/thou/は廃れはじめており、すでに古語的な (archaic) な語と見なされていた。したがって、日常性を超えた特別な表現を行う場合には、口語的な/you/ではなく文語的な/thou/が選ばれた。スタイルを目的とした/thou/の使用に関して、OEDは具体的に五つの場合を挙げている。つまり、神やキリスト (God or Christ) に語りかける場合、説教 (homiletic language)、詩 (poetry)、頓呼法 (apostrophe)、高揚した散文 (elevated prose) においてである。

Abbottの分類は主にShakespeare演劇に関するものであり、詩作品にそのまま適用できるわけではない。演劇の言語は社会的な状況に大きく依存するが、叙情詩的な言語においては事情が異なる。ソネット詩人は聞き手の/lady/を女王とも神とも見なすのであり、社会的な力関係から判断すると、/you/のほうが適切である。しかし、恋愛詩においては/thou/のほうが好まれ、/you/で統一したSpenserは珍しい例である。/thou/のほうが標準的であるという事実は、ソネットの二人称代名詞の選択においては、話者と聞き手の社会的関係よりは詩的表現として適切さのほうが優先されたことを示している。

*

*Astrophil and Stella*の中にはStella以外を二人称代名詞で言及したものが多数ある。Stellaに対して/you/か/thou/での言及を少なくとも一回以上含むものは25ある。ところが、Stella以外の聞き手に二人称で呼びかけたものは44ある。この中には重複も含まれている。たとえば、46番のようにCupidへの語りかけと、Stellaへの語りかけを同時に含むものがあるからである。Stella以外へ語りかけた44のソネットは、人間を聞き手にするものと、人間以外の無生物と動物を聞き手にするものに大別することができる。表1は人間を聞き手にするソネットの番号、聞き手に対するvocative、使われた二人称代名詞(pronoun)の種類、回数を示している。この中には複数名詞で呼びかけた54番 (maids) と104番 (wits, fools) は文法的に/you/しか使えないので含めな

い。vocativeの項で [] を付したものは、呼びかけはないが、文脈から想定できる聞き手を示したものである。したがって、15, 28, 51の名詞は複数形の可能性もある。なお、テキストとしてはW. A. Ringler (編) の *The Poems of Sir Philip Sidney* を用いた³。

次の表2は人間以外の聞き手に使われた二人称代名詞の種類と回数を示している。表1と同じく、/thou/と/you/の選択の自由がない複数名詞は除外した。また、同一の聞き手に対して複数のvocativeが使われた場合は、なるべく中心的な名詞を挙げた。46番のようにキューピッドに対して‘boy’, ‘Love’, ‘a poor wag’ と三種類の呼びかけがあれば、Loveで代表させた。しかし、106番の‘absent presence’ と ‘hope’ は、同一の対象を言い換えたに過ぎないが、文脈を離れた辞書的な意味では互いに異質な語彙であるので、両方を挙げた。しかし、辞書的に同等な意味のvocativeが使われていても、それぞれに対して /thou/ と /you/ が同一でなければ、vocative を複数あげている。たとえば、56番では ‘schoole of Patience’ には /you/ が、 ‘Patience’ には /thou/ が使われている。80番では、同一の ‘lip’ に対して /thou/ と /you/ とが使われる。なお、スペリングはRinglerの版に字体も含め忠実に従った。ただし、行頭で始まるvocativeについては、語頭の大小文字を判別できないので小文字に変換してある。10番(reason), 65番(love), 67番(hope), 69番(envie) などがそれである。

表2に見るように、人間以外へのアポストロフィにおいては/thou/の使用度が圧倒的

表1 アポストロフィ(人間)における二人称代名詞

no.	vocative	pronoun	
14	friend	you	2
15	[poet]	you	9
21	friend	you	3
28	[friend]	you	1
51	[friend]	you	5
69	friend	thou	1
92	good Sir	you	8

表2 アポストロフィ(人間以外)における二人称代名詞

no.	vocative	pronoun	
4	<i>Vertue</i>	thou	11
10	reason	thou	8
11	Love	thou	8
12	<i>Cupid</i>	thou	9
16	Love	thou	1
31	Moone	thou	5
32	<i>Morpheus</i>	thou	3
39	sleepe	thou	5
46	<i>Love</i>	thou	9
49	Fancie	thou	1
56	schoole of Patience Patience	you thou	2 4
61	<i>Cupid</i>	thou	1
65	love	thou	9
67	hope	thou	9
69	envie	thou	2
70	Muse (Muse & pen?)	thou you	1 1
72	desire	thou	5
79	kisse	thou	1
80	lip lip	thou you	2 2
81	kisse	thou	2
83	<i>Philip</i>	you	11
84	highway	you	8
85	heart	thou	5
88	absence	thou	3
93	truth	thou	1
94	griefe	thou	9
96	thought	thou	7
98	bed	thou	4
103	Tems	thou	3
105	dead glasse	thou	4
106	absent presence hope	thou	3

に高い。人間以外の聞き手との対話は、現実にはありえない詩的想像の中でのみ許容される文学的なコンベンションであり、日常的な/you/ではなく文語的な/thou/を使うのが普通だった。ところが、Sidneyのアポストロフィにおいては/you/を使ったものが4例ある。しかも、同一のソネットのなかで/thou/と/you/の混在さえある。56番は'schoole of Patience'に対して、初め/you/を使い、途中から/thou/を使う。80番では'lip'に対して初めは/thou/を、終わりで/you/を使っている。

アポストロフィの聞き手(単数)に/you/を使う例は、SpenserにもDanielにも僅かに見つかる。しかし、Sidneyの場合と違うのはそれらの/you/が単数二人称らしくないことである。AmorettiのなかにはElizabeth以外に対して単数形vocativeを使ったソネットが8ある。vocativeとその番号を示すと、thought(2), Lord of love(10), love(19), smile(39), paper(48), Lord of lyfe(68), bosome(76), toung(86)である。この中でbosome(76)に対しては/you/が使われている。

Fayre bosome fraught with vertue's richest tresure,
the neast of love, the lodging of delight,
the bowre of blisse, the paradice of pleasure,
the sacred harbour of that heavenly spright;

How was I ravisht with your lovely sight. (引用中の下線は筆者、以下同じ)

しかし、この'your'が単数二人称であることは目を引きにくい。'bosome'が呼び出されて'your'で受け止めるまでに、4行にわたって説明が続いており、5の同格を並べた説明が'bosome'に複数に近い性質を与えるからである。他方、Danielの*Delia*の中にはverse(2, 8, 33), hart(8), goddesse(10), hart(25), Albion(48)などの単数vocativeがある。1601年以降の版には'Time'に呼びかけたものも追加されている。このうちverseに対してだけは/you/が使われている。しかし、Danielではverseは形だけの単数である。'Go, wayling verse, the Infants of my love'(2)では「愛から生まれた子供たち(Infants)」, また'And you, my verse, the Advocates of love'(8)では「愛の代弁者達(Advocates)」と、verseの同格には複数形名詞が置かれている。意味的に見るとverseが複数概念であることが、次の引用ではさらに明瞭である。'These plaintive verse, the Posts of my desire'(4)「これらの嘆きの詩, 欲望の使者たち」ではthisの代りに'these'が使われている。*Delia*という連作全体を通して、verseには集合的複数の概念が維持されている。Spenserと同様に、Danielも単数二人称には/thou/を使い、複数の概念を持たないvocativeに/you/を使うことはなかった。無生物へのアポストロフィにおいては、二人とも/thou/(単数)と/you/(複数)に関する古い文法に忠実な詩人であり、ごく僅かの違反においてさえ、二人称代名詞に関する単複の区別がその精神において運用された結果と見なせるのである。

*Astrophil and Stella*のなかで二人称単数として/you/が使われた例は、*schoole of Patience*(56), *lip*(80), *Philip*(83), *highway*(84)である。次の70番にある/you/はここに含めない。

Cease eager Muse, peace pen, for my sake stay,
I give you here my hand for truth of this,
Wise silence is best musicke unto blisse.

の‘you’が指すのは、‘pen’だけではなくその前の‘Muse’も合わせた複数の可能性があるからである。ところが、上にあげた4例の/you/は明確な単数二人称である。‘*schoole of Patience*’は、「忍耐という徳目を教える学校」(単数)である。

Fy, schoole of Patience, Fy, your lesson is
Far far too long to learne it without booke.

の‘your’を一般人称(複数)と取るのは当たらない。世のいわゆる全てのlessonが長すぎるのではないからである。また、‘*schoole of Patience*’を「忍耐学派(の人々)」(複数)との解釈も適当ではない。その意味のschool, つまりOED 5. a ‘the body of persons that are or have been taught by a particular master (in philosophy, science, art, etc.)’の初出は1612年であり、比較的新しい用法なのである。ここでの‘*schoole*’の語義はOED 4.に言う「教育を受ける場所、環境としての学校」である。/you/が使われた残りの3例については、単数二人称であることは何の説明も要さないように思える。80番の結びで/you/が使われた‘*lip*’に対しては、1-2行目では単数/thou/が使われており、途中での単複の変化はない。また、83番が語りかける‘*Philip*’はStellaが愛玩する一羽のスズメである。同様に、84番の‘*highway*’はStellaが住む屋敷へと続く文字通りに一本の街道を指している。以上の4例の/you/はいずれも複数的な意味の含みを持たない単数二人称代名詞なのである。

*

表2における/thou/と/you/の用例を比較すると、二人称単数/you/の使用には限定的な条件があることが分かる。アポストロフィで/you/が使われた例に共通することは、全てが有形の「もの」(もしくは生物)だけであることである。また反対に、観念あるいは想像的人格など無形のものが聞き手になる場合には、一つの例外もなく/thou/が使われる。したがって、アポストロフィによる人間以外の聞き手に対する二人称代名詞の用法においては、無形と有形という大区分が関与することは間違いないと思われる。

無形の聞き手には抽象的観念や想像的人格がある。抽象的観念が聞き手となった例には、Vertue(4), reason(10), Love(11,16,46), sleepe(39), Fancie(49), Patience(56), love(65), hope(67,106), envie(69), absence(88), truth(93), griefe(94), thought(96), presence(106)がある。本来的な意味での想像的人格は、Cupid(12,61), Morpheus(32), Muse(70)である。しかし、アポストロフィにおける抽象的な観念は、いずれも擬人化されているという意味でいくらかの想像的人格としての性質を帯びる。Fancie(4), Patience(56), Love(11,16,46)など大文字で始まるもの、イタリックで表記されたLove(46)などは、中でも擬人的性質が強く想像的人格に近い。だから、LoveはCupidと、またsleepはMorpheusと類義的である。このように抽象的観念と想像的人物との境界は重なるが、どちらも無形であるという点では変わらない。物理的には実在しないこれらの聞き手に対して、Sidneyはすべて/thou/を与えている。

アポストロフィにおいてSidneyが二人称単数/you/を使い始めるのは、有形の事物においてからである。有形の事物には無生物の事物と生物がある。生物の例はスズメに対するPhilip(83)だけである。無生物は10例ある。そのうち/thou/が使われたものは、Moone(31), kisse(79,81), lip(80), heart(85), bed(98), Tems(103), dead glasse(105)の8例である。‘kisse’は可視的行為とみなして有形に分類した。/you/が使われたものは、schoole(56), lip(80), highway(84)の3例である。前者と後者との間に辞書的な意義レベルでの決定的な差異はない。しかし、有形の名詞のレベルからのみ/you/の使用が混じり始めることから推測できることは、有形のものを指す名詞においても、無形と有形の区分に基づく基準が生きているのではないかということである。/thou/グループと/you/グループの名詞の間には、辞書的なレベルでの差異は少ないが、話者の語用のレベルにおいては無形と有形の区分けが行われていた可能性がある。たとえば、kisse(79,81)は可視的行為とはいえ無形にも分類できる。heart(85)は、有形の「心臓」という「もの」として使うことも、無形の「心」という概念としても使うこともできる。同様に、Moone(31)は擬人化されるとき想像的人格としての性質を帯び、「もの」としてのthe moonとは区別できる。つまり、「有形」のグループの名詞については、「無形」として使うか、「有形」として使うかは、話者の語用において決まる。これから具体的に見ていくように、この語用の違いが、/thou/グループと/you/グループの間を分ける基準に関与しているように思える。

*

有形のものを無形の概念として使う場合（二人称代名詞はthou）

有形のものとして分類される聞き手が無形の概念としての側面を優先して使われた例として、‘heart(85)’と‘dead glasse(105)’を挙げることができる。本来heartの意味には、「心臓」という有形のものとしての意味と、「心」という無形の概念としての意味とがある。85番でStellaの家を間近に見たAstrophilが――

I see the house, my heart thy selfe containe,
Beware full sailes drowne not thy tottring barge.

と呼びかける‘my heart’は、有形のものとして扱われている。静まるように命じられているのは、激しく鼓動する心臓だからである。‘my heart’は、次に「よろめく船」(thy tottring barge)に、また「難船」(wrack)に見立てる比喩の中でも、「もの」(心臓)として扱われている。しかし、行が進むにつれて、意味の焦点は‘heart’が果たすべき本来の役目のほうに移り、次第に「心臓」の意味がなくなる。後半のsestetの中では、‘heart’の役務が他の肉体器官である目、耳、息、唇と対比されている。

But give apt servants their due place, let eyes
See Beautie’s totall summe summ’d in her face:
Let eaes heare speech, which wit to wonder ties,
Let breath sucke up those sweetes, let armes embrace
The globe of weale, lips *Love’s* indentures make:
Thou but of all the kingly Tribute take.

目の取り分（美貌）、耳の取り分（言葉）、息（芳香）、腕（身体）、唇（愛の証文）の取り分を挙げていき、最後に‘heart’の取り分として‘Love’を挙げる。その時の‘heart’は、eyes＝視覚、eaes＝聴覚、breath＝嗅覚、armes＝触覚、lips＝味覚に対して感覚器官を統合する精神としての‘heart’であり、1行目で鼓動していた‘heart’からかけ離れている。

105番の‘dead glasse’も、肉体的な器官としての「眼球」ではなく、目という器官に与えられた「視覚」について言及する比喩である。

Unhappie sight, and hath she vanisht by
So neere, in so good time, so free a place?
Dead glasse, doost thou thy object so imbrace,
As what my hart still sees thou canst not spie?

近くを通り過ぎたStellaの姿を呆然と見逃したうかつさを嘆き、「目」を非難する一連である。‘dead glasse’は、前の‘unhappie sight’を受け、後の9行目では‘mine eyes’で言い換える。‘Unhappie sight’は「視覚」の衰れさを指す。「死んだガラス」‘dead glasse’が言及するのは眼球としての形状や性質ではない。心の目にはStellaをいつも見えているのに、肉体の目は実物のStellaの姿を見損ねた。‘dead glasse’が指

しているは、そのような肉体の目がもつ「盲目性」である。

上の二つのアポストロフィでは、有形の聞き手を「もの」としてよりは「概念」として扱うことで、どちらも似ているが、次の点で違いがある。‘my heart’を聞き手とした例では、無形の概念としての使用は、辞書レベルの運用を超えない。話者がそれを使用する以前から、heartという語には、有形と無形とあいだにまたがる意義の広がりがあるからである。ところが、後者の例で使われた無形の概念は辞書的意義を超えている。glassという語にはもともとは有形としての意義しかない。「肉体（物質）の目の盲目性」を象徴する意味は話者が運用において作り出したものである。

話者が運用において一つの語に与える意義が増大すればするほど、それは概念と呼ぶよりは何かについての観念、さらに想像と呼ぶほうが相応しくなる。たとえば、98番の‘bed’も有形のものとしての寝台以上のものを指している。しかし、‘heart’や‘dead glass’の場合とは異なり、話者が新しく与えた意義はbedの「概念」ではなく、bedに対して話者が抱く「観念」と言うべきである。bedを聞き手とするのはルネッサンスの恋愛詩の常套であり（Ringler）、bedに関する「観念」には、すでに慣習的な型ができていた。Petrarchの*Canzoniere*には‘a hard field of battle is my bed’（226）が見える⁴。Sidneyが次の詩行で歌っているのも、Petrarchに由来する「安息のかわりに苦しみを与える所」としてのbedである。

Ah bed, the field where joye’s peace some do see,
The field where all my thoughts to warre be traird,
How is thy grace by my strange fortune staind!
How thy lee shores by my sighes stormed be!

平和な牧場にも悲惨な戦場にもなりえる平原に譬えられたこの「寝台」には、安眠と不眠の象徴としての意味があるだけであり、物理的なものとしての意味はほとんどない。

同様の意味で‘Moone’を聞き手とした31番においても、月の「もの」としての側面は消滅している。たしかに31番は現実の月に語りかけるように始まる。

With how sad steps, ô Moone, thou climb’st the skies,
How silently, and with how wanne a face,
What, may it be that even in heav’nly place
That busie archer his sharpe arrowes tries?

事実初めの二行は天空にあがっていく月を描写している。しかし、それ以降は現実の月に関する叙述は消えて、月に関する観念にもとづく内省だけが終わりまでを埋めている。中心になる観念は、

(1) 眠れない恋人が月に向かって嘆くものだというノクターンの伝統

(2) 天界 (heavens) は永遠に不変であり、月から下は変化する物質界とする世界観

(3) Dianaを処女性の象徴とする神話

などであり、現実のthe moonとは関係のない文学的観念である。キューピッドは矢を「天上でも」‘even in heav’nly place’ と問いかけるのは、「本来不変であるはずの天上でも」の意味であり、天界と地上の対立についての考え方を踏まえている。ただ、恋に悩むAstrophilと貞節なDianaとは同一視し難い。Sidneyは自分の心理を「もの」に投影するAstrophilの誤った主観性を自嘲的に表現しているのかも知れない。現実の月に語りかけながら、Astrophilが目を向けているのは、「もの」としてのthe moonではないのである。

アポストロフィにおいては「もの」に属する聞き手であっても、それに関する観念が優先されるのは自然なことである。聞き手として擬人化すること自体が、すでに「もの」としての側面よりは話者がそれに与える想像的観念を優先させることを意味するからである。しかし、有形の「もの」への語りかけが無形の「観念」への語りかけと異なるのは、有形の「もの」は話者にとって外的に存在することである。特に、現前する有形のものを聞き手とする場合には、話者が与える観念と目の前にある「もの」との対応関係を無視するわけにはいかない。31番において作者Sidneyは、「もの」としてのthe moonを見ないで‘Moone’に自己を投影したAstrophilの主観を描いている。この意味では‘Moone’(31)は話者Astrophilの外部に「もの」として存在していない。ところが、事物が聞き手として選ばれる場合に、「もの」としての側面に話者Astrophilの関心をひくことがないわけではない。たとえば、現前する‘Tems’に呼びかけた103番では、Astrophilが‘Tems’に与える文学的想像は31番と同様に、「もの」を見えなくするほど優勢であるが、全てが「もの」との対応のために使われていることで31番とは明確に異なる。

長い歴史をもつテムズ河は、物理的な河である以前に文学的観念として存在している。「最も美しい島で一番の河」‘The chiefest River of the fairest Ile’ (Richard Barnfield)であり、擬人化も伝統的であった。Petrarchは川にLauraの足や手にキスするよう呼びかけている。103番の‘Tems’の描写も、美しい河についての詩的観念を貼り付けた華やかな絵のようである。

O happy Tems, that didst my *Stella* beare,
I saw thy self with many a smiling line
Upon thy cheereful face, joye’s livery weare:
While those faire planets on thy streames did shine.
The bote for joy could not to daunce forbear,

While wanton winds with beauties so devine
 Ravisht, staid not, till in her golden haire
 They did themselves (ô sweetest prison) twine.
 And faine those Æols' youthes there would their stay
 Have made, but forst by Nature still to flie,
 First did with puffing kisse those lockes display:
 She so discheveld, blusht; from window I
 With sight thereof cride out; ô faire disgrace,
 Let honor' self to thee graunt highest place.

Stellaの船を浮かべた‘Tems’が喜びのあまり笑顔の波を立てる描写は、人に見立てたイメージで覆われており、現実の川面に起こったことが容易には把握できないほどである。しかし、‘Moone’の描写と決定的に異なるのは、この中では比喩が「もの」としての川を伝えるために使われていることである。だから、分厚い比喩を透かして、川面の出来事が見えてくる。たしかに、「多くの笑いの皺」‘many a smiling line’が「喜びの顔」‘Upon thy cheereful face’の上に広がり、その上に「あの美しい星」‘those fair planets’が輝く——という描写のなかには、「川」に関する縁語がないため、「もの」としての‘Tems’よりは比喩のほうが明瞭に見える。しかし、「流れに輝く」‘on thy streams did shine’で、読者の焦点は「もの」としての‘Tems’をはっきりと捉えることができる。第二連以降でも比喩が溢れているが、すべて現前の‘Tems’で起こる出来事と厳密に対応している。Stellaを乗せたボートが喜びのあまり踊る(The boat for joy could not to dance forbear)さま、金髪に絡みつくりたずらな風(wanton winds)、髪を乱されて赤面するStellaなど、現実のテムズ河の情景を描写したものである。話者が‘Tems’に与える擬人的想像と現実の「もの」としての‘Tems’の出来事との両方が、このソネットの中では、対応し融合している。

「もの」と「観念」との違いを/you/と/thou/で区別する場合

アポストロフィの相手について、有形の「もの」と無形の「観念」との関係について、詩人はいつも意識的であるわけではない。しかし、話者がその区別を意識し、さらに/thou/と/you/で使い分けた例がある。たとえば、‘*schoole of Patience*’と‘*Patience*’に語りかける56番では/you/と/thou/の両方が使われる。

Fy, schoole of Patience, Fy, your lesson is
 Far far too long to learne it without booke:
 What, a whole weeke without one peece of looke,
 And thinke I should not your large precepts misse?
 When I might reade those letters faire of blisse,
 Which in her face teach vertue, I could brooke

Somewhat thy lead'n counsels, which I tooke
 As of a friend that meant not much amisse:
 But now that I, alas, do want her sight,
 What, dost thou thinke that I can ever take
 In thy cold stuffe a flegmatike delight?
 No Patience, if thou wilt my good, then make
 Her come, and heare with patience my desire,
 And then with patience bid me beare my fire.

第一連の比喩はStellaに会えない期間を「忍耐を教える学校」に例えたものである。長いラテン語の暗誦に嫌気がさした小学生が、「忍耐の学校」に悪態を吐いている。ここで'schoole'についての直接の叙述はない。しかし、「学校」のイメージリーが強い。'lesson' (教訓), 'learne' (暗記), 'booke' (教科書), 'precepts' (教訓), 'misse' (怠る), 'reade' (読む), 'letters' (文字), 'teach' (教える)などは、すべて「学校」を想定した表現であり、'schoole'が話者にとって具体的に目に見える「もの」として存在していたことを示している。ところが、7行目あたりからこの「学校」のイメージリーが消える。'Somewhat thy lead'n counsels, which I tooke/As of a friend that meant not much amisse' (7-8) では、それまでの教師と生徒の関係が対等の友人関係に変化する。'your lesson' (教訓) も 'thy counsels' (助言) になる。ところが、12行目で明らかになるのだが、この途中で聞き手が'schoole of Patience'から抽象的な観念'Patience'に変わっている。'schoole'のイメージリーが消える7行目を境にして、/you/が/thou/に変わるのは偶然とは思えない。聞き手が有形から無形へと変わるのに並行して、Sidneyは二人称代名詞を/you/から/thou/に切り替えたように思える。

/thou/と/you/とを使い分けた別の例は80番である。このソネットの中での/thou/と/you/の使い方は対比的である。初めの2行で'Sweet swelling lip'と呼びかけて/thou/を2回使い、結びの2行でも'Sweet lip'と呼びかけるが、ここでは2回/you/を使っている。このように/thou/と/you/を対比させたのは、このソネットの前半(octave)と後半(sestet)の対立を明示するためであったと思われる。このソネットの主題は「観念」としての'lip'と「もの」としての'lip'との対立と解釈することができるからである。

Sweet swelling lip, well maist thou swell in pride,
 Since best wits thinke it wit thee to admire;
 Nature's praise, Vertue's stall, *Cupid's* cold fire,
 Whence words, not words but heav'nly graces slide.
 The new *Pernassus*, where the Muses bide,
 Sweetner of musicke, wisdom's beautifier:
 Breather of life, and fastner of desire,

Where Beautie's blush in Honour's graine is dide.
Thus much my heart compeld my mouth to say,
But now spite of my heart my mouth will stay,
Loathing all lies, doubting this Flatterie is:
And no spurre can his resty race renew,
Without how farre this praise is short of you,
Sweet lip, you teach my mouth with one sweet kisse.

/thou/を使った前半ではStellaの‘lip’への賛美が行われる。しかし、その賛美はソネット詩人の通例なのだが、Stellaという個人の唇を描写したものではない。6行続く詩句はそれが唇のものであることを忘れさせるほど抽象的である。‘nature’s praise’「自然の神も自賛する作品」、‘Vertue’s stall’「美德の女王が座る玉座」、‘Cupid’s cold fire’「理性的な愛の松明」はどれも、‘lip’限られた部位の描写ではなく、人間の理想を述べているに等しい。つまり、それぞれ前から順に、肉体的な美、その肉体を支配する徳、理性的な愛を表現するからである。「天の恩寵」‘heav’nly graces’が流れ出る泉や、ミューズが住むパルナサスに例えるくだりは、美しい言葉を発する唇を想起させる。しかし、「美の恥じらいの色が名誉の緋色に染まる場所」‘Where Beautie’s blush in Honour’s graine is dide’は、具体的な唇の色の形容というよりは、肉体的な美と精神的な名誉とが調和した理想を語っており、その中に「もの」としての‘lip’はほとんど見えない。唇の理想についての詩的表現において、現実の‘lip’との対応が考慮されていないからである。

ところが、/you/を使った後半sestetでの‘lip’の扱いは、前半とは対照的に「もの」としての側面が強調されている。このソネットにはoctaveとsestetと間に大きな断絶がある。‘Thus much my heart compeld my mouth to say’「これだけのことを私の心は口に（無理やり）言わせたが」とsestetは始まる。つまり、octaveで描かれたのは‘my heart’が見た‘lip’であり、これからsestetが扱うのは‘mouth’にとっての‘lip’である。感覚器官としての‘mouth’にとって、‘my heart’が見る‘lip’の観念は「もの」との対応を欠いた「虚偽」‘lies’、「お世辞」‘flattery’でしかない。‘mouth’が理解できるのは「もの」としての‘lip’だけだからである。

聞き手の「もの」の側面が強く出た例（二人称代名詞はyou）

聞き手を想像的存在に見立てることで成立するアポストロフィでは、聞き手について「もの」としての側面に大きな関心が向けられることは少ない。「もの」としての‘lip’を扱った80番にしても、厳密に言えば、「観念」としての‘lip’を否定してその後に残る「もの」に目を向けただけに過ぎない。無生物の「もの」としての側面に関心を

示しながら、普通の意味でのアポストロフィが成立するとはたして言えるだろうか。‘highway’に語りかけた84番は、「もの」としての側面への関心を残しながらアポストロフィが行われた珍しい例である。

「もの」としての‘highway’への関心の強さを示すのは、‘highway’への言及における写実性の強さである。もちろん、他のアポストロフィの聞き手の場合と同じように、‘highway’に対する比喩的な見立てはある。しかし、比喩による想像の描写と現実の「街道」の描写とを比較すると、後者の前者にたいする優先が明らかである。

Highway since *you* my chiefe *Pernassus* be,
 And that my Muse to some eares not unsweet,
 Tempers her words to trampling horses feet,
 More oft than to a chamber melodie;
 Now blessed *you*, beare onward blessed me
 To her, where I my heart safeliest shall meet.
 My Muse and I must *you* of dutie greet
 With thankes and wishes, wishing thankfully.
 Be *you* still faire, honord by publike heed,
 By no encroachment wrongd, nor time forgot:
 Nor blam'd for bloud, nor sham'd for sinfull deed.
 And that *you* know, I envy *you* no lot
 Of highest wish, I wish *you* so much blisse,
 Hundreds of yeares *you* *Stella's* feet may kisse.

第一連は旅の道中に詩想をもたらず「街道」をパルナサスの山に見立てている。2行目からそのパルナサスに住むミューズの比喩が導入される。‘tempers」[調律する]、‘feet」[詩脚]、‘a chamber melody」[室内音楽]はミューズの縁語である。しかし、豎琴を弾くミューズの情景は見えてこない。「乱暴に踏みつける馬の足(音)」‘trampling horses feet’に合わせて歌うのは、パルナサスに住むミューズらしくないからである。反対に、ミューズのかわりに現在の街道の情景は明瞭である。つまり、一部のよき理解者をもつ (to some eares not unsweet) 詩人が、宮廷の室内音楽 (a chamber melody) を逃れて騒々しい馬の上で今このソネットを作りながら歌っている⁵。比喩と現実の関係は‘Tems’の場合とは反対である。‘Tems’では比喩の向こうに現実の情景が見えるのに対して、このソネットでは、現実の情景のほうがミューズの比喩よりも明瞭なのである。

比喩に対する「もの」としての‘highway’の描写の優先は第三連にも認めることができる。部分的に読むと、その中には擬人法と見なせる表現が含まれている。‘be you still faire’は若い女性に対する言葉である。‘honourd’, ‘wrongd’, ‘blam’d’, ‘sham’d’は人間に対する語彙である。しかし、全体として読むと、このような擬人法はあまり

目立たない。一つ一つの表現が、街道 (highway) の事実即ち叙述だからである。‘honour’d by public heed’ は公的な管理が行き届いた様子、‘By no encroachment wrong’d’ は地主が公道を侵害して私有地とする当時の悪弊に言及したものだし、‘no time forgot’ はにぎやかな街道が廃れて往来が絶えること、‘Nor blam’d for blood, nor sham’d for sinfull deed’ は追剥ぎや盗賊が犯す罪とそれによって流される血に言及している。現実の街道についての長い叙述が続いた後に、突然「何百年もお前がステラの足にキスできるように」‘Hundreds of yeares you Stella’s feet may kisse’ という祈りで結ばれる。この中の人間のイメージが鮮烈であるのは、それまで殺風景な「街道」の情景のなかに唐突に出現するからである。

ただこのソネットの注意すべき点は、「街道」の人格化の不足にも関わらず、話者の語りかけは、いかにも現実の人間にたいする口調で行われることである。/you/が8度も使われているのは、無生物へのアポストロフィとしては異例である。しかも、相手との会話の楽しむように、余り意味のない言葉あそびにあふれている。特に、同語反復が多い。‘Now blessed you, beare onward blessed me’ は、馬への拍車に合せたものだろうか、‘blessed you’ と ‘blessed me’ が繰り返される。Stellaに会う話者は「幸運」(blessed) であり、他方 ‘highway’ は「崇めるべき」(blessed) という区別があるのかも知れないが、厳密な意味のためではなく、拍車に合わせて反復を楽しんでいるだけのように思える。‘With thankes and wishes, wishing thankfully’, また同工である ‘Of highest wish, I wish you so much blisse’ についても同じことが言える。このような陽気な饒舌を聞くのに最も相応しい相手は、親しい友人のような存在以外にはない。しかし、その対話の相手は、上述したとおり、僅かの擬人化はあるが全体としては荒涼とした現実の ‘highway’ である。つまり、84番の聞き手は、一方では、Astrophilの上機嫌な感謝と祝福を受ける親しい友人の役割を与えられ、他方では、聞く耳を持つはずがない「もの」の役割を与えられている。

‘highway’ に与えられた二つの役割の対立は有形の事物へのアポストロフィがもつ矛盾に帰因するように思える。84番ではアポストロフィでは異例に多くの/you/が使われている。その使い方は、これまで見てきた/you/からの延長と見なせる部分と、その中におさまらない部分とを含んでいる。想像や観念に対するアポストロフィの場合とは違い、聞き手の ‘highway’ は話者の現前に存在している。だから、聞き手が実存するという面だけを見れば、84番の対話は人間相手の対話と同じ次元にある。表1「アポストロフィ (人間) における二人称代名詞」で見ると、人間への語りかけは標準的に/you/である⁶。84番の聞き手に対して/you/が使われた理由は、‘highway’ は人間ではないが、少なくとも実在するという意味では、現実的な対話での聞き手との

共通点を持つからである。

しかし、言うまでもなく、アポストロフィの対象がもつ「もの」としての側面を重視すればするほどそれを聞き手と見なすことが困難になり、やがてアポストロフィそのものが破綻する。実際に、*Astrophil and Stella*全体を通して、有形のものを聞き手とするソネットは限られた数しかないし、そのなかでも聞き手の「もの」としての側面に注目することはさらに少ない。80番は結びで前半での‘lip’の観念性を否定して肉体としての‘lip’に目を向ける。しかし、‘lip’を「もの」として扱うとき、アポストロフィの対話は終わっている。84番は「もの」としての‘highway’に対して初めから終わりまで、人間に対する二人称代名詞/you/を使って語り続ける。しかし、「もの」へのアポストロフィがもつ矛盾が消滅しているわけではない。Marian S. Reganが言うように、ここでのAstrophilは「情熱で自制を失った恋人」‘the “lover” to be beside himself with passion’⁷として描かれているのであり、事物へのアポストロフィに内在する矛盾は、Stellaに会えるという期待で興奮した話者の誤った心理のなかで忘れられているにすぎない。作者SidneyはAstrophilの心理を表現するためにアポストロフィの矛盾を利用しているのである。

*

*Astrophil and Stella*にはアポストロフィによる語りかけが多い。本稿では、人間以外を聞き手とした場合に二人称代名詞(単数)/thou/と/you/がどう使用されるかについて考察した。/thou/と/you/の使い分けの基準は、基本的には聞き手の性質に基づいている。無形の聞き手に対しては、例外なく/thou/が使われる。無形の聞き手には、抽象的な概念、あるいはアレゴリー化された観念、さらに想像的人格をもつものなどがある。ところが、聞き手が有形になると、依然/thou/の頻度が高いが、部分的に/you/の使用が混じり始める。有形の聞き手には、生物も含まれるが、ほとんどは無生物の事物である。有形の無生物に対する/thou/と/you/の選択においては、話者に与えられた自由度が高いことは事実であるが、恣意的ではない。有形の事物であっても、観念や想像的人格など無形のものとして利用される時には/thou/が使われる傾向がある。反対に、何かに見立てたり、何かの象徴として扱うのではなく、聞き手が「もの」として扱われる時には/you/が使われることが多い。有形の聞き手に対してどちらの二人称代名詞を選ぶかの基準は、聞き手の性質それ自体によるのではなく話者がそれをどう扱うかの運用に基づくのである。

注

- 1 Maurice Evans(ed), *Elizabethan Sonnets*. (London: Rowman & Littlefield, 1977). Sidney以外の詩人 (Spenser, Daniel, Barnfield)からのソネットの引用はすべてこの版による。
- 2 E. A. Abbott, *A Shakespearian Grammar*. (London, Macmillan, 1869).
- 3 William A. Ringler(ed.), *The Poems of Sir Philip Sidney*, (Oxford, 1962).
- 4 Mark Musa, *Petrarch: The Canzoniere, or Rerum vulgarium fragmenta* (Indiana, 1996).
- 5 Katherine Duncan-Jones(ed.), *Sir Philip Sidney*, (Oxford, 1989). Sidneyが野外で得た詩想をノートに書き留めるところをしばしば目撃したという同時代人の証言がある。
- 6 Mariann S. Regan, *Astrophil: Full of Desire, Emptie of Wit*, *English Language Notes*, 14. (1977), p. 254.
- 7 Stella以外の友人などに語りかけたもののうち69番だけが例外的に/thou/である。